
チャオプラヤー川の夕日

川瀬白帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャオプラー川の夕日

【Nコード】

N9083Y

【作者名】

川瀬白帆

【あらすじ】

微笑みの国、タイ。

癒しの街、バンコク。

それが一転、銃撃と惨劇の街に！

常夏の楽園が、いったいなぜこんなことになってしまったのだろう？

最初は誰もが樂觀視していた。

日本人カメラマンが銃撃された、あの日までは……。

第一話 日本人記者銃撃（2010年、4月10日）（前書き）

体験者・続ツツキ 真明マサアキ 文・川瀬カワセ 白帆シラホ

私の名は続真明。日本人。年齢……そろそろ白髪が気になる頃。
1997年からバンコクで暮らしている。

これは、私が2010年バンコクで、実際に体験した赤シャツ騒
動の記録である。

第一話 日本人記者銃撃（2010年、4月10日）

バンコクにおいて、四月は真夏である。暑い……理不尽なくらい暑い。額から滝のように汗が流れ、目を開けていられないほどだ。

一方タイの人たちは、汗の出方が日本人と全く違う。身体の作りが熱帯民族だから、汗腺の数が多くて少しずつ汗をかくので、滝のような汗にはならない。ようするに、霧吹きで吹いたような状態……だから揮発しやすい。

日本人の汗はダラダラ流れるから揮発しにくく、効率よく熱をとってくれない。おまけに陽射しはガラガラ、まるで雨季のスコールのように天から降り注ぐ。

それを遮るために、女の子はみんな日傘をさす。日焼けしやすいタイでは、むしろ北国の人よりも白い肌に憧れる傾向があるようで、女も男も色白の方がもてるのだ。

新たに立ち上げる事業のため、暑さにめげながらもバンコク市内を駆けずり回っていた私は、プラティナムのパンティックプラザで、その日遅い昼食をとった。

牛の血を入れたそば、クイッティエオ・ナムトック……牛の血と聞いて驚くかもしれないが、タイのそば屋ならどこにでもある、ありふれたメニューだ。

この料理は、牛の血が凝固する寸前で火を止めるのがポイントだ。作り方を見ると、まず麺を茹でてどんぶりに入れる。次に大鍋の中で、ひしゃくですくったスープに、小さなひしゃくですくった牛の血をピュッと入れ、ぐるぐるかき回しながらあっためる。そして血が凝固する寸前に鍋から出して、麺の上からかける。

これに好みで、砂糖と酢漬けの唐辛子をかけて食べる。何もかけなくてもおいしいが、私はたっぷりかけて、甘さと酸っぱさと辛さ

が絶妙にバランスされるようにうまく調整する。

甘酸っぱさがたまらなく食欲をそそり、牛の血がスープにコクを与え、滋養強壯の効果ももたらす。暑さにバテた時にはぴったりのメニューだ。値段は三十バーツ（約九十円。当時のレートは、円の約三分の一）。

タイに來た折にはぜひ味わってもらいたい、私のおすすめの一品だ。

パンティックプラザは、バンコクの電腦街として知られている。一つのビルが、秋葉原の電気街みたいなミニ店舗の集合体になっていて、怪しげなショップがひしめいている。

PC パーツや、海賊版ソフトが氾濫し、日本人が歩いていると、「エロビデオ、エロビデオ、しゃっちょさん」などと、日本語でしつこく声をかけられたりする。

このビルの二階にあるフードコートは、セルフサービスで好きな料理を選んで食べられる。日本の大型スーパーにあるフードコートと、ほとんど同じシステムだ。そこでナムトックを食べていた時、私は奇妙な噂話を耳にした。隣の席にいたタイ人たちの会話が、自然と耳に飛び込んできたのだ。

要約すると、こんな内容だった……。

反独裁民主戦線、UDD（通称、『赤シャツ』）のラーチャプラソン集会会場で、ステージ裏に安置されていた仏像が、今日の昼頃、誰も触っていないのに突然倒れて、真っ二つに割れてしまった。

この仏像は、デモに出発する前に幹部たちが蠟燭をともして、無事を祈っていたことで知られていた。赤シャツデモ隊の間で、これは不吉の前兆ではないかと、不安が広がっているという。

噂話をしていた連中は、赤シャツのことを快く思っていないようで、これは天罰に違いないと笑っていた。この件は翌日の新聞にも

載ったから、実際にあったことらしい。

赤シャツデモ隊と、タイ警察及び国軍は、もう一ヶ月ほどに渡って、市内随所の目抜き通りで小競り合いを続けている。

毎年のようにクーデターや反政府運動が起こるタイで、こうした騒動に慣れっこのはずのバンコクっ子たちも、こうも長くこう着状態が続くとほとほと嫌気が差してきて、良くも悪くも事態が動くことを望んでいた。それに、この騒動は特にタイの主要産業である観光業に、多大な悪影響を及ぼしていた。

しかしこの時点で、今回の赤シャツ騒動を深刻に受け止めていた者がどれだけいただろうか？ 私も、またいつもの小競り合いぐらいにしか考えていなかった。

その夜九時頃、へとへとになって帰宅した私は、自宅マンションの一階にあるマッサージ屋で、フットマッサージを受けていた。

タイマッサージの一種であるフットマッサージ、いわゆる足裏マッサージは、近年日本のテレビのバラエティー番組で、罰ゲームに使われて知られるようになった。

もちろん本場のフットマッサージは、決して罰ゲームなどではない。このイタ気持ちよさは癖になる。たった二百バーツ（約六百元）で、一時間も至福の時を味わえるのだ。ちなみに普通のタイマッサージは、二時間で三百五十バーツほどが相場。

フットマッサージは一時間、普通のマッサージは二時間というのが、タイマッサージの基本。そう聞くと、たいてい日本人は『え、そんなに長いのか？』と、首を傾げるけれど、実はもう二時間追加してもらいたいぐらい気持ちがいい。

そのマッサージ店は、奥に向かって簡素なベッドがズラッと並んでいる。フットマッサージ用の長椅子もあるけれど、私は疲れたからあえてそれには座らず、マッサージ用のベッドに身を横たえた。

マッサージ嬢は若い女の子で、客は私だけ。だけど、決して変な

気は起きない。なにしろ彼女は、マッサージに関してとはとびつきりの技術と才能を持っているけれど、天は二物を与えずという格言がぴったりの子だったから。

壁には、王様とお妃の写真（タイの店では、どこでも必ず飾ってある）と共に、店主の息子が出家した時の写真が掛けてあった。タイの男性の間では、一生に一度は出家するという習慣がある。期間は数週間から数年までまちまちだ。もちろん、中には日本と同じ意味で出家する人もいる。

店主は未亡人で、息子は二十歳ぐらい。実は彼女には、現在日本人の愛人がいる。定年退職して、バンコクに住み付いたその愛人から出資してもらった金で、この店をオープンしたのだ。

店内にはテレビが一台あり、見る気もしないタイのメロドラマが流れていた。マッサージが始まってすぐ、そのドラマが臨時ニュースに切り替わった。

この時アナウンサーが語ったのは、コークウワ交差点にて、軍と赤シャツとの間で事実上の市街戦が勃発。1人死亡した模様というニュース速報だった。

デモ隊側がガスボンベを爆発させた事がきっかけで銃撃戦が始まり、デモ隊側が使用した爆発物によって、軍関係者20人前後が負傷。死亡したのがどちら側かは不明……。

私はそのニュースを見て、『またかよ、いよいよ死人が出たか』と、少々うんざりした気分になった。

それから三十分ほどして、また画面がニュース速報に切り替わった。

今度はアナウンサーが、「銃撃戦で、日本人カメラマンが死亡。詳細は現在確認中!」と語った。

マッサージ嬢が、思わず叫んだ。

「ありゃー、日本人も撃たれたよー!」

私もびっくりして、顔を上げてつぶやいた。

「え、日本人が死んだの？」

私はこのニュースを見て、初めて日本の報道人もバンコクに取材に来ていたことを知った。今回のタイの混乱は、国際ニュースでは大事件として扱われ、欧米の報道人は大挙してバンコクに押し付けてきていたが、国際情勢に無頓着な日本では、ほとんど報道すらされていないと聞いていたからだ。

いくらタイのことには無関心の日本でも、これは騒ぎになるに違いない。私はそのなじみのマッサージ嬢と、この話題で盛り上がった後、自宅に戻ってテレビをつけた。

ところがこれだけの大事件にもかかわらず、もう臨時ニュースは終わっていて、どのチャンネルものんきに通常放送をしていた。もしかしたら、政府の報道規制が入っているのかもしれない。

そこで私は、インターネットニュースを見た。すると、死亡したのはロイターの記者でヒラモトヒロユキさん。現時点で、負傷者296人、死者5人と出ていた。

それからしばらくして、テレビの通常放送が突然王様の写真に切り替わった。『タレーンカオ』だ。垂れ幕を背景に、政府の広報官が厳かに語り始めた。

タレーンカオとは、地上波全チャンネル一斉の緊急放送。ただし、臨時ニュースとは違う。政府声明の発表の場だから、政府の言いたいことだけを一方的に伝える。

この時、政府広報のアナウンサーが語ったのは、赤シャツデモ隊の暴挙によって、コークウワ交差点で多数の死者が出たということ。デモ隊側は武装していて、軍はゴム弾やガス弾を使用していたと主張していた。

さらに十一時半頃にはアビシット首相が登場して、政府には他に選択肢がなかったと弁明した。

タレーンカオではなく、各局製作の臨時ニュースも流れ始めて、刻々と新情報が入ってきた。銃撃された日本人の正しい名前は村本博之さん、四十三才。コークウワ交差点付近で、軍と赤シャツの衝突に巻き込まれ、左胸を撃たれたということがわかった。

タイでは日本と違って、テレビやインターネットに政府の規制が入る。しかし中国などとは違い、一応は民主主義の国、反体制の赤シャツ側も、堂々と自分たちの主張を訴えるチャンネルを持っている、ケーブルテレビやネットで見るができる。

日本人は、政府がマスコミに干渉するなんて、タイはやっぱり後進国だと蔑むかもしれない。しかし海外から日本を見ると、日本のメディアはあからさまに偏向したニュースを伝えているし、NHKのニュースでさえ、見ていて政府のしがらみや国際情勢の影響を強く感じて我慢がならない。特にアジアの覇権を握ろうと画策し、最近横暴ぶりが目に余る某国に対する気のつかいようは、危機感すら覚える。

これは、私個人の意見というより、タイ在住日本人の多くが抱いている感想だと思う。海外で暮らしていると、日本にいた時には見えなかったことも見えてくるのだ。

翌日になると、テレビで緊急特番やタレーンカオが放送される時間がどんどん長くなっていった。日本大使館から、注意を喚起する緊急一斉メールも届いた。

確認された死者も、21人に増えた。村本さんのほか、軍兵士が4人、赤シャツ側が16人で、負傷者は858人に達した。

現場の生々しい映像もテレビで流され、事件の概要が徐々に明らかになってきた。ニュース映像を見る限り、現場は戦場だった。

特に衝撃的だったのは、赤シャツの男が頭を撃たれる瞬間を撮影した映像だ。しかもこれは、タレーンカオで流された。

タイでは、猥褻画像に対する規制は厳しいが、なぜか残酷描写に

は寛容で、テレビでも雑誌でも、日本では考えられないような血なまぐさい画像が平気で流される。プライバシー保護の観念もないから、遺体の画像だってばかしなど入らない。

タレーンカオで見た映像は、だいたいこんな感じだった……。

道路で警官隊、軍隊と、赤シャツデモ隊が、すさまじい勢いでぶつかり合っている。兵士たちが道路を前進している中で、いきなりパン、パンと激しい破裂音がして、花火のように明るく閃光がはじけた。

これはM79、グレネードランチャーが撃ち込まれたようだと、広報官が語っていた。それで兵士たちは、蜂の巣つuitたような騒ぎになり、退却を始める。道路に横たわる兵士の死体、仲間に引きずられる血まみれの負傷兵、苦痛にうめき声をあげている。目を背けたくなるような惨状が映し出されていた。

画面は、今度は赤シャツ側が集まっている通りの場面に切り替わる。赤旗をつけた旗竿を持った赤シャツの男が、群集の中に立っている。銃声がパンパンパンと聞こえるが、その場所は戦闘地域ではなく、人々は普通に往来している。

ライフルを持った黒い服の男が、カメラの前を横切った。その男は、立てたライフルを上着で包み込むようにして歩いていたが、突然ライフルを構えると、旗を持った男の頭に向けて、至近距離で発砲した！

旗を持っていた男の頭頂部が吹っ飛ばされ、倒れた男の頭から、どろどろになった脳や髄液が流れ出し、周りにいた人たちはパニック状態に！

人々が倒れた男に注目している間に、撃った男は銃をまた立てて、平然と闇に消えて行った。

この映像を見せながら、広報官が解説した。

「赤シャツの人が撃たれたから、軍隊がやったんじゃないかという噂が流れています、この映像を見て、はっきり軍人がやったんじ

やないことがわかりますね……ここ、黒い服の男が、画面左から入ってきましたね……」

広報官はとどころで映像を止めて、レーザーポインタで画像を指し示しながら語った。

「はい、ここで撃ちました……ごらんの通り、この男は軍服を着てないですよ」

撃たれて倒れた男の額から上は、完全になくなっていた。普通の弾丸ではこうはならない。恐らく、炸裂弾を使用したのだろうと解説していた。

このように、タレーンカオでは、現場検証的なこともやった。

日本人記者が撃たれた時の映像も振り返って、広報官が、「軍人はM16を連射していません。このように、軍隊の発砲した音は、パン、パン、パンと一発ずつ離れた音です。連射じゃないし、人民に向けていません。威嚇して、けん制するだけのものです。本当に撃つ場合は、連射してブルルル、ブルルルという音になります」と主張していた。

それから、現場にいた軍の将校が、赤シャツは非道なやつらだ、政府は正しいなどと主張した。もちろんタレーンカオは、政府の正当性をアピールする場でもあるので、そういったインタビューの放送には、けっこう時間を割いていた。

アビシット首相も、冷静になるようにと、何度もテレビで市民に訴えかけた。

日本人記者は、軍隊からの発砲に当たったと一般的には言われている。デモ隊と軍隊が衝突した最前線の、赤シャツ側にいて撃たれたからだ。しかし、そうは断言できない部分もある。

そんな危険なところにいたのに、彼はヘルメットも防弾チョッキもつけていなかった。他の外国メディアの記者はつけていたから、日本人の危機意識のなさや、安全管理も問われるところだ。

旗を持った男に関しては、軍隊にやられたんだとか、いや赤シャツの自作自演だとか、色々噂が流れたが、結局犯人は謎のまま。村本さんの件と同様に、政府とUDDは、お互いに相手が犯人だと主張し合っている。

またこの頃から、夜になると武装した謎の黒服集団がどこからともなく現れ、赤シャツに加担して軍隊を攻撃するという情報が流れ始めた。実際この晩も、複数の黒服男の映像がマスコミによって撮られている。

黒服の正体については、実はセー・デーンの手下じゃないかという噂が流れた。セー・デーのこと、カッティヤ・サワディポン陸軍少将は、現役軍人でありながら堂々と赤シャツ支持を表明し、部下を大勢引き連れてUDDに合流した鷹派で知られた人物だ。

アビシット首相も、赤シャツの中にテロ集団が紛れ込んでいる、今後は一般市民のデモ隊とテロ集団を分けて対処する方針だと、テレビで明言した。これは暗に、セー・デーを牽制した発言だ。

ただし、私がこれらのニュース映像を見たのは、事件後二日目の晩までだ。四月十三日に、いったんバンコクを離れてしまったからである。

ソンクラーン

ソンクラーンはタイ歴の正月で、今年は四月十三日から十五日まで連休になっている。日本では、水掛け祭りとして知られている。

タイが一番暑いこの時期に、人々が無礼講で断りなしに水を掛け合う。水鉄砲から、果ては消防ホースの放水まで使用される。

バンコクの街角で、楽しみに水を掛け合う人々の姿が、タイの風物詩として、毎年日本のニュースでも紹介されるから、ご覧になった方も多いだろう。

タイに來た当初こそ、私もこのバカ騒ぎを楽しんだが、十三年もここで暮らしていれば、逆にうっとうしく感じるようになる。

出かける度にずぶ濡れになって着替えるのはめんどくさいし、外国人は特に標的にされやすいから、むしろ外出を控えるようになってしまう。

なにしろ無礼講というよりは、普段虐げられている人たちが、リツチそうな人に一矢報いるチャンスだと捉えている節があるのだ。

だから私は、例年この時期にバンコクを脱出する。もっともタイの人たちにとっても、ソクラーンは正月休みだから、故郷のある人はみんな帰省してしまうので、正月の東京と同様に、バンコクは閑散としてしまう。まあ、氣候を考えると、正月よりお盆に例えた方がしっくりくるけれど。

政府とUDDの衝突も事実上一時休戦となり、この時ばかりはぼつかりと穴の空いたような平和な時が、バンコクを包み込んだ。

私は日本人の友人二人と、四月十三日から二泊三日で、カンボジアのカジノへ遊びに行った。

実は私は博打が大好きで、カンボジアのカジノへしょっちゅう行っているのだが、この時は気分を変えて、いつもの行きつけのカジノではなくて、初めての場所に行ってみた。

タイタンキングスカジノは、カンボジアとベトナム国境の、秘境と言っても差し支えない場所にあった。ともかく遠かった。

私たちはまず、飛行機でプノンペンに行った。するとカジノから空港まで、でかい乗用車で迎えに来ていた。車は私たち三人だけを乗せると、カジノに向かった。

目的地まで、三時間半もかかった。でも送迎は無料。着いた場所はど田舎だったから、そうでもないかと客を呼べないのだろう。

後になってから私は、その場所はプノンペンから車で行くよりも、ベトナムまで飛行機で行って国境を越えた方が断然早いということに気づいた。

国境の何もないところを車で突っ走って行くと、ジャングルが開けて、忽然と何軒かのカジノが現れる。見た人が圧倒されるような巨大でど派手な建物だ。けれど、やっぱりラスベガスと比べると垢抜けていない。しかしそれなりに清潔で、サービスは行き届いていた。

従業員もホステスも、美人が多かった。場所柄、ベトナム人とのハーフの子がいっぱいた。もっとも私たちの目的はあくまでもカジノで、色気はなしだが……。

特に、ホテルは素晴らしかった。一泊八十ドル、日本の感覚だと安い、このへんぴな場所を考えると有り得ない値段！ 超高級ホテルなのだ。それだけに清潔だし、豪華で素晴らしい部屋だった。

従業員一同、日本人がここに来たのは初めてだと大喜びで、大歓迎してくれた。帰り際には、サプライズも用意されていた。突然、ホテル代をタダにしてくれると言いだしたのだ。その代わりまた来てねと、笑顔で送り出してくれた。

カジノで少し儲けさせてもらった上に、ホテル代までタダになり、私は極楽気分で帰ってきた。バンコクは大変なことになっているのも知らずに……。

ディンソー通りの惨劇

（この章は、事件についてより深く知りたい方のために、かなりデープに書いています。面倒くさいと感じたら、読み飛ばしてください）

ここで、日本人記者が射殺された四月十日土曜日に、バンコクで何が起こったのか、事件の全体像を日本の読者にもわかりやすいように書いてみようと思う。

ただし、ここで書くことは、新聞やテレビなどあらゆるソースか

ら得た情報をまとめたものであり、私自身が直接見聞きしたことはないということを、了承した上で読んでいただきたい。

四月十日の騒動では、バンコクの重要な場所が三つ登場する。

一つ目が、ラーチャダムヌーン通り。王宮に続くどでかい通りで、並木道を挟んで片側六車線ものの広さがある。実用のためというより、タイの威信と王威を誇示する狙いで作られた路だ。

ラーチャダムヌーン通りは、実は三つにわけられる。王宮からパーンファア橋まで続く、前述した太い部分が、ラーチャダムヌーン・ノーク通り。赤シャツデモ隊は、パーンファア橋を拠点にして、この大通りを占拠していた。

ラーチャダムヌーン・ノーク通りは、パーンファア橋を渡ったところで左に折れて細り、ラーチャダムヌーン・克蘭通りと名を変えて、民主記念塔を周回して貫く。

二つ目の重要ポイントが、この民主記念塔だ。1932年に起こった立憲民主革命を記念して建てられた、タイの民主主義のシンボルとも言える巨大なモニュメントである。そのため、政府に対しての抗議運動が行われる際には、毎回ここが舞台となる。今回も、赤シャツの大集団が占拠を続けていた。

そしてこの夜、最も激しい戦闘現場となったのが、この民主記念塔でラーチャダムヌーン・克蘭通りと交差する、ディンソー通りだった。

ラーチャダムヌーン・克蘭通りは、民主記念塔を過ぎるとコークウア交差点を経て、王宮広場で左折してラーチャダムヌーン・ナイ通りとなる。コークウア交差点で右折してタナーオ通りに入れば、目の前がカオサン通りだ。

三つ目の重要ポイントが、このカオサン通り。ゲストハウスが集中していることから、バックパッカーの聖地としても有名で、カオ

サン・ロードとして世界的に知られた場所であり、外国人の間ではタイで最も有名な通りと言える。

三つともタイを象徴する場所であるが、もしカオサン・ロードで大事があれば、タイの観光業が被る打撃は計り知れないものがある。背後に王宮を控えていることもあって、このカオサン・ロードは、政府にとって最終防衛ラインと位置づけられていた節がある。

この夜は、タナオ通りのカオサン・ロード入り口を塞ぐように、兵士が隊列を組んで守っていた姿が目撃されている。

四月十日は、市内数個所で軍とデモ隊の衝突が起こったが、ここでは村本さん銃撃事件のあった現場に絞って話を進めることにする。十八時五十分頃、軍隊はコークウア交差点を拠点にして、民主記念塔を占拠していたデモ隊の強制排除に乗り出した。すると知らせを聞いた赤シャツたちが、続々と民主記念塔に集結を始めた。

この夜撮られたニュース映像を見ると、両者は最初穏やかに対峙していた。お祭り気分の赤シャツたちが、通りに流される音楽に合わせて踊る姿や、軍人と握手する姿まで撮影されている。ところが二十時頃、突然起こった銃の乱射音によって、事態は激変する。

あまりにも唐突に鳴り出したため、最初は誰もが祭りのクラッカー音ではないかと思ったようだ。しかし、みるみる緊張感があたりを包み込んでいく。一説では、デモ隊がガスボンベを爆発させたことがきっかけで、銃撃戦が始まったとされている。実際デモ隊は、以前からガスボンベを武器として使っていた。

政府は排除にあたって、催涙ガスやゴム弾を使用したと主張している。確かにそれらを使用しているが、実弾を使用したのも明らかだ。デモ隊は軍に、投石や火炎瓶で応戦した。しかしデモ隊の中にも、明らかに武装勢力がまじっていた。武装した黒服と呼ばれる男たちの姿や、彼らが銃撃する姿も、マスコミによって数多く撮られている。

この激しい衝突の後、兵士は銃を空に向けて威嚇射撃をしながら、民主記念塔からゆっくりと後退を始める。その直後、路上で激しい爆発が起こった。M79、グレネードランチャーが使用されたのではないかと推測されている。

この爆発は、銃撃された村本さんのすぐそばで起こったので、村本さんが撮影した映像にもはっきりと映っていた。映像から、現場はデインソー通りだと思われる。

この爆発によるものか、この後さらに数回起こったという爆発が原因かはわからないが、ともかく軍の指揮官が集まっていた中で爆発があり、現場を指揮していた陸軍少将ともう一人の指揮官が重傷を負った。同時に、ロムグラオ・トゥワタム大佐が、武装した黒服の集団から銃撃されて死亡！ 受けた銃弾は一発や二発ではなかったらしい。

報道では、大佐はコークウア交差点で銃撃されたとされている。報道が正確ならば、爆発現場とは違う場所で殺されたことになる。最もタイでは、銃撃戦もコークウア交差点で起こったと報道しているから、民主記念塔付近の事件現場は、すべてコークウア交差点でひとくくりされてしまっているのかもしれない。

ともかく、デインソー通りで起こったこの爆発をきっかけに、軍は混乱の内に退却を始める。もちろん、指揮官は狙い撃ちされたと考えるのが妥当だ。指揮官へのピンポイント攻撃によって、軍の指揮系統はズタズタにされたに違いない。

村本さんの映像にも映っているが、この時の惨状は前述した通りで、複数のニュース映像に生々しく記録されている。道路に横たわる血まみれの兵士……ピクリとも動かない。大怪我を負って苦痛にうめく兵士、仲間に引きずられる負傷兵……。

村本さんは、この後赤シャツ集団の中に入り撃たれた。殺害現場はタナオ通りとされているが、デインソー通りではないかという

という説もある。ちなみに、旗を持った赤シャツが頭を撃たれたのも、デインソー通りである。

この夜の死者は二十一人と発表されたが、八百人以上の負傷者数と比べても、少なすぎるのではないかとささやかれている。戦闘は、カオサン・ロードの一部にまで及び、結局軍は撤退をよぎなくされた。

強制排除に出たはずの軍は最初から弱腰で、現場では何台もの装甲車があっさりデモ隊の手に落ちていく。軍人も人の子、同国の、しかも民間人に銃口を向けるのは抵抗があっただろうし、そもそもこの日まで、軍は赤シャツ側が重火器で応戦してくるとは予想していなかったであろう。この夜の目的はあくまでもデモ隊の排除であって、銃撃戦は全く想定外の展開であったようだ。

事実上、政府側の敗北で終わったわけだが、この夜の銃撃戦によって、両者の間に埋めようのない溝ができてしまったことは否めない。赤シャツは勝利したが、平和的解決の道を自ら閉ざしてしまったのである。

赤シャツ側が、なぜこのような強硬手段に出たのか？

旗を持った赤シャツの男は、撮影中のテレビカメラの前で、戦闘中ではない場所で殺された。いったい誰が、何のために？

正体不明の黒服やスナイパーの目撃情報など、今回の赤シャツ騒動には謎があまりにも多すぎる。底知れぬ事件の深淵を象徴する出来事だが、これらは複雑怪奇な謎の幕開けに過ぎなかったのである。

第二話、バンコクライフ

タイ王国について

赤シャツ騒動についての話を進める前に、タイという国について、そして私のバンコクでの生活について、ちょっと寄り道して話しておこう。

タイは昔、カンボジアだった。カンボジアを侵食することによって、タイは領土を広げた。

みなさんも、カンボジアのアンコール・ワット遺跡はご存知でしょう。すぐれた灌漑と農耕の技術によって、一大王国を築いたクメール王朝の時代、領土は現在のタイ南部まで広がっていた。その頃のタイは、スコータイなどの小国がいくつか存在していただけで、国家としては、まだ形を成していなかった。

しかしタイ族の勃興によって、カンボジアはめっちゃめっちゃになった。なぜならタイはカンボジアを侵略するにあたって、農業技術者を抹殺するという戦法をとったからだ。

カンボジアやタイは平地が多く、灌漑用の池を作っても、水を目的地まで流すことが非常に難しい。そのためには、高度な土木技術が必要だった。灌漑の水門の開け閉めも難しく、そういった重要な技術は世襲制度がとられて、何代にもわたって優秀な人材が育成されていった。

タイが勢力を伸ばしていった時、まずそういう人たちを狙い撃ちにしていたのだ。灌漑をだめにして、農業をだめにして、国を弱体化し、侵略した。技術者たちの死と共に、最高で三毛作まであった農耕技術も失われてしまった。

この侵略によって、タイ自身も、優れた農業技術を学ぶ機会を逸してしまったのだが、それでも豊かな熱帯の風土では、種さえ蒔けば作物は採れた。

近年、日本のJICAジャイカが、タイの農業を改善して二毛作を教えた
ら、タイの農民たちはすごいと手放して喜んだ。何をそんなに
喜んでいるのかと思ったら、農民たちが、「一年で二回米が採れ
た。これで、来年は働かなくてもすむ」と言ったので、JICAの
人たちはあきれ返ったという逸話が残っている。

JICAネタをもう一つ書くと、貧しい山間部や農村で、娘が売
られて売春婦になっている現実に胸を痛めたJICAの職員が、娘
たちに織物を教えて地場産業として育てれば、少しは抑止できるに
違いないと考えて、職業訓練所を開設した。

そして、さあここで学んで、社会に出て働きましようという生徒を募
集したのだが、誰も来ない。そこで、来てくれたらただで昼ご飯
を食べさせますと条件をつけた。ところがそれでもこない。それな
らば、ここで勉強したらその分時給を払いますよと、そこまで言
ったのに、それでも来なかった。

娘たちに理由わけを聞いたら、「なんでそんなわずかな時給のために、
重労働をしなければならないの？ それよりも売春した方が手っ取
り早くお金を稼げるわ」と、逆に文句を言われたそうだ。

最も近頃二毛作に関しては、高価な肥料が必要な上に、酷使され
た土地の疲弊が問題となり、非効率ではあるが、自然と調和した伝
統農法が見直されるという逆転現象も起きている。

タイ人は民族的には、カンボジア系のクメール人を始め、多民族
の血が混じっている。地続きの国の人たちは混じりやすいのだ。実
は日本人の血が混じっているという人もいる。アユタヤ時代に海を
越えて日本人が大量に入り、日本人村が形成された。しかし、後に
破壊されてしまい、生き残った人たちは現地に同化していったと考
えられる。

タイ語もクメール語の影響が強いが、五つの言語が複雑に交じり
合っているので、日本語よりも難しいと言われている。実際、タイ

語の文法で説明されているのは八割ほどで、ともかく例外が多い。多民族である故に排他的ではなく、極めて寛容。タイ人は親切であるということ、寛容であるということ、美徳としている。その反面、正確に何かをやるとか、勤勉に何かをやるというのは苦手。この点は日本人と正反対だ。長く住んでいると、このタイ人氣質に悩まされ続けることになる。

タイ人が親日的だということも、よく知られている。

戦前戦中を通して日本に対する印象がよかったことが大きな理由だが、皇室同士が親しいというのも特筆すべき要素だ。また日本が、戦後に爆発的経済成長をとげたことも、尊敬の対象となっている。ともかく日本人にとってタイは、アジアで最も居心地のいい国だと言えるかもしれない。

ところでみなさんは、バンククの正式名称をご存知だろうか？
まるで落語のじゅげむみたいな、世界一長い都市名として有名だ
ということはご存知の方も多いだろうが、最後まで言える人はま
ずいないだろう。

『クルンテープ・マハナコーン・ボーウオーン……』

もちろんタイ人だって、誰もが言えるわけではない。一般には、『クルンテープ』と呼ばれている。

では、バンコクという名称は、いったいどこからきたのか？
実はクルンテープの古名なのだ。つまり、東京のことを江戸と呼んでいるようなもの。したがって、タイ人同士の会話でバンコクが使われることはまずない。けれど、もちろんバンコク＝クルンテープだということは、タイ人なら誰でも知っている。

蛇足だが、クルンテープは天使の住む都という意味で、ロスアンゼルス（天使の消えた都）とは正反対の意味を持っている。

バンコクに住んだわけ

私がタイにはまったきっかけは、寺院を見たことだった。

私は大学で建築学を専攻して、卒業後は建築関係の仕事をしていた。二十年近く前、仕事でベトナムの遺跡調査に行った。

当時は直行便がなく、経由地のバンコクで一泊しなければならなかった。それで降り立ったドンムアン空港のまん前に、初めて見たタイのお寺、ワット・ドンムアンがあったのだ。そこに行って、私は衝撃を受けた！

これが寺院なのか？

こんな派手派手しい建物が？

ベトナムの仕事が終わってから、私は改めてタイへ旅行に行った。期待した以上に、建築物は見るべきものがあった。シックを受けた。料理も素晴らしくうまかった。さらに興味を惹かれたのが、聞こえてくる言葉の美しさだ。特に若い娘が話すタイ語は、鳥のさえずりのように愛らしかった。

ベトナムと比較して、タイのインフラの良さも魅力に感じた。道路はどこも舗装されているし、長距離バスも一応時間通りに来る。旅行して、すごく楽だと感じた。

最初は、タイに住もうなんて考えてなかった。ただあの国で言葉が通じれば面白いなと思った。

あそこに住んだら、どうなるんだろうなあ……。

もっと建築のことを知りたいなあ……。

私はタイに関する本を読み漁った。そして気がいたら、帰りの予定もたてずにタイに来ていた。

人生というのはまことに不思議だ。ちょっと舵を切ってみる、ちよつと寄り道してただけで、思いも寄らない運命と出会いが待っている。

私が、タイの国立大学に開設された外国人のためのタイ語教室で

学んでいた時、ひょんなことから、私の建築に関する知識に目をつけた教授が現れた。そして紆余曲折があつて、教わる側が教える側になってしまった。

私は大学講師として、教鞭を執ることになった。講義名は、『東南アジアの建築・基礎一』

さらに、教授の助手として日本を案内したり、カンボジアの遺蹟調査などもお手伝いしている。

もちろんタイで大学講師をしているからといって、食べていけるほどの給料をもらえるわけではない。むしろボランティアみたいなもの。したがって、私の場合は副業が本業になっている。

副業については、次章で語ることにしよう。

食生活

最後に、バンコクでの私の食生活について話そう。

食事は外食が中心……そもそも私が借りている部屋には、自炊の設備が付いてない。タイは外食が異様に安い上、美味しいから、独り者は自炊するメリットがないのだ。

タイ料理は、屋台から超高級レストランまで、ピンからキリまである。もちろん地方色も豊かで、中でもタイ東北地方の郷土料理、イサーン料理は人気がある。

イサーン料理で有名なのは、ガイアーン（タイ風焼き鳥）や、ソムタム（青パパイヤのサラダ）などで、家の近所の通りでも、イサーン料理の店が軒を連ねている。

タイ人が日常的に食べる代表的な料理は、通称ぶっかけ飯と言って、ごはん自分で選んだおかずを二種類ぶっかけてもらって、二十五バーツ（七十五円）払う。安くてうまくて量も多く、これだけで腹いっぱいになる。テイクアウトもできて便利だ。

大学に行った時には、私はいつも学食でこのぶっかけ飯を食べる。

あまりにも食べ過ぎて、さすがにもう飽きてしまつて、ある晩学食にすし屋ができた夢を見た。

学食に行くと、すし屋のカウンターがあつて、板前が「このすしは、築地から魚を直送してるから新鮮ですよ」と、笑顔で迎えてくれた。目覚めた時の虚しさは、未だに忘れられない。

前章で牛の血のそば、ナムトックのことを書いたが、タイそばの店もよく行く。

麺はバーミー（小麦の麺）……いわゆるタイラーメンと、クイッティエオ（米の麺）……日本で言うところのビーフンがあり、クイッティエオは太さなどに応じて何種類がある。ちなみにナムトックは、センミーという極細のクイッティエオで作る。

クイッティエオはご飯を食べているのと同じだから、かなりあっさりしていてうまい！ 野菜や肉団子などの具がたっぷり入り、辛さや甘さは自分で調節できる。

私は、朝はたいてい麺類ですます。そして、昼はぶっかけ飯が多い。

もちろんいくら好きでも、タイ料理ばかり食べ続けていたらいやになる。そこは大都市バンコク、ここには色々な国の様々なタイプの料理がある。安くて味もよく、私はそれをローテーションで繰り返し食べている。

中華街に行けば、本物の中華料理を食べられるし、ラーメン亭とかへ行けば、レバニラ炒めなどの和風中華料理もある。たまにはイタリア料理やフランス料理を食べに行ったり……もちろんローカルなタイ料理よりは高いけれど、日本と比べればずっと安い。

例えば知人が来たら必ず連れて行く、絶品イタリアンで、ピザとパスタ、ビールにワインまでたのんでも、一人四百バーツ（千二百円）ほど。ちょっと高級なフレンチでさえ、五、六百バーツで飲み食いできる。

和食に関しては様々なレベルがあるが、普段行く店だとかかっても二百バーツ。それで天ぷらセットとか、メンチカツセットなどが食べられる。もちろん米は日本米で、味もいける。

定食屋のチェーン店で、大戸屋という店がある。そう、日本ではおなじみのあの大戸屋だ。正直な話、日本では積極的に行きたいとは思わない。ところが、タイの大戸屋はうまい！日本の店とはメニューが全然違う。高級志向なのだ。

どういうわけか、タイでは大戸屋のチェーン店がすごい勢いで増えている。タイ人も大好きで、客はタイ人の方が多い。アッパーミドル系のタイ人が、入れ代わり立ち代わり来店して、ホットケ定食とかを食べている。

昔はタイ系列のフジレストランという店に行っていたけれど、今では本物の日本料理レストランがどんどんできているから、もう行く必要がない。

日本のラーメンはタイにもすっかり定着して、バンコクには桂花ラーメン、長崎ちゃんぽんなど、日本の有名ラーメン店がずいぶんできた。ただ、味は日本の方がうまい気がする。

私の友達にも、ラーメン屋をやっているのがいる。ラーメンのレベルは、昔と比べて格段に上がった。

ちよっと前には、『スクムビット通りラーメン戦争』などという特集記事がローカル新聞に載るぐらい、日本のラーメンがブームになった。

タイでは仏教のある祝祭日に、有名な九つのお寺をお参りするとご利益があると言われていて、たくさんの方が実践している。仏教では、九は縁起のいい数字なのだ。それにあやかっ、あるタイの雑誌で、一日で九軒のラーメン屋を回ろうという、ラーメンツアー・キャンペーンをやったら、大いに盛り上がった。

私も、記事で紹介されていた店を何軒か回った。まあ、こういっ

たブームのおかげで、私はすごく助かっている。

水に関しては、生水は絶対飲まず、ミネラルウォーターを常飲している。水道水も飲まない。最も、飲もうとしたってまずくて飲めないが……。

生野菜よりは温野菜。サラダは、危なくないことを信じて口に入れる。

考えてみれば私の食生活は、日本にいた時よりこっちの方が充実している気がする。

タクシン

（この章は、事件についてより深く知りたい方のために、かなりデカイプに書いています。面倒くさいと感じたら、読み飛ばしてください）

なぜ、タイで今回の騒動が起こったのか、そもそも赤シャツとはいったい何なのか、すべての鍵をタクシンという男が握っている。したがって、タクシンのことを知れば、騒動の背景も自ずと見えてくるはずである。ここで、タクシンについて解説しよう。

アジアでは、華僑が政治経済の中枢を牛耳っている国がほとんどで、タイも例外ではない。

みなさんもタイ人と聞けば、民族的に特長のある顔を思い浮かべるだろう。タイの街中を歩けば、見かける顔はほとんどそのタイ族系の人たちだ。

ところが、例えば一步国立大学の構内に足を踏み入れたら、ここは中華大学なのではないかと首を傾げるかもしれない。

大学だけではない、芸能界、経済界、政界など国の中枢部では、どっちを向いても中華系の顔ばかり目に付く。この国は、人口比わずか数パーセントの華僑の人たちによって動かされているのだ。な

にしる現在の王族さえも、華僑の末裔なのである。

タクシンのことを理解するには、まず客家の^{ハツカ}ことを知らなければ始まらない。

客家とは、中国南部出身の華僑の一大勢力で、全華僑の三分の一を占めると言われている。

中国における客家人は、独特の文化と言語を持っていて、漢民族の中でも少数派であるため、排他的で同族でまとまって暮らしている。教養があり、教職や商売を生業とすることが多く、よくアジアのユダヤ人と例えられる。

タクシンの母親は客家系中国人、父親は客家系中国人三世。タイ生まれでありながら、正確なタイ語の発音ができず、客家なまりで話すタクシンは、タイ人から見れば、筋金入りの客家なのだ。

タクシン・チナワット。1949年、7月26日生まれ。

チナワット一族は、シルクの取引で財を成した客家系華僑の名家で、タクシンは警察官僚から実業家に転進して大成功を収めた。自ら興した携帯電話会社で得た巨万の富を元手に、政界に進出したのである。

タクシンには二つの顔がある。貧困者の味方という顔と、独裁者の顔だ。それは、そのまま功罪となって表れている。

まず功の部分から話そう。タクシンはそれまで権力者が見向きもしなかった農村部に、初めて光を当てた。タクシンほど農村部に金を落とした政治家はかつていなかった。これによって、特にタイ東北部や北部の農民から絶大な支持を得た。

また都市部の、タクシーやトクトクの運転手などの、低所得者層からも慕われている。商売の儲けをピンハネするマフィアを取り締まり、タクシー購入の援助もしたからだ。マフィアは警察や軍とつながりがあり、それまでは誰も手を出せなかった。

そして麻薬の取り締まり。タクシンは、警察、軍隊まで投入して

麻薬撲滅作戦を実行し、麻薬組織に大打撃を与えた。この政策は、タイから流入する麻薬に悩まされていたアメリカからも評価された。

次に、罪の部分を話そう。

麻薬取り締まりの強行は、一方で数多くの無実の人々が投獄されたり、殺されたりしたにも関わらず、組織の大物幹部は無罪放免にされたりして、人権侵害だと国際的な非難を浴びた。

選挙では、徹底的に金をばら撒いて当選した。タイでは、票は金で買うものというのがそれまでも常識だったが、タクシンは当時タイ一の富豪と言われた自身の莫大な資産をつぎ込んで、買収組織まで作り、農村部の票を買いあさった。

そして買収したのは有権者だけではない、政党から議員へ支給される、政治資金名義の賄賂も見逃せない。タクシンから支払われる政治資金は、タクシン批判が高まるたびに倍増された。

通常、政党は企業からの献金で成り立っている。ところが、タクシンは自身が潤沢な資金提供者であるため、政党から金が流れ出るという逆転現象が起こった。当然ながら、金をもらう側よりもあげる側の方が立場が上であり、それが結果となって表れた。

2001年の総選挙で歴史的勝利をして、首相に就任したタクシンの人気にさらに火をつけたのが、選挙公約の実施だった。

タイでも、立候補者は有権者に、聞こえのいい大盤振る舞いの公約をぶち上げる。しかし、公約は実行されたためしがない。公約とは、有口無行なものなのだ。国民の誰もがあきらめていた。ところがタクシンは実行したので、国民は良い意味で驚いた。

タクシンが就任後に実行した政策の、主なものを挙げると……。
貧困者の徳政令。

農民への低利融資制度。

一回の通院費用が30バーツの医療制度や、健康保険の整備。
百万バーツ村落基金。

百万頭の牛のプロジェクト。

パソコンを公立学校に配備。

風俗店の深夜営業禁止。

麻薬取り締まり強化。

そしてタクシノミックスと呼ばれた公的資金大量投入の経済政策。そのほとんどが、ばら撒き政策そのものだったが、世界的な好景気の波にも乗り、当時のタイ経済は順風満帆で、タクシンの支持率は急騰した。

もちろんばら撒き政策は、将来へつけを回すことであり、莫大な借金をして遊興にふけているのと同じことだ。しかしタクシンは、赤字の拡大を巧妙に隠し、国民から見えにくくした。

そしてこの人気に乗じて、タクシンの暴走が始まった。

自身と一族への利益誘導……タクシンには、つねに不正献金や所得隠しの疑惑がつきまとった。

公務員の給料を上げてのご機嫌取り……タクシンが金やポストをばら撒いて手なずけたのは、政界だけではなくかった。警察、軍、司法の人脈にまで影響力を拡大していった。

さらに通信、マスコミ関係の会社を支配下におくことにより、強力なマスコミ統制を布いた。また憲法を改正して、首相が非常事態宣言などの強権を発動できるようにしたことも、内外のマスコミやジャーナリストから非難された。

やがて、タクシンの人気にもかげりが見え始める。

最大の原因は、富と権力がタクシンに一極集中したことによってもたらされたひずみである。それまで華僑の間で分配されてきた権力と利潤が、たった一人の権力者の手に握られることによって、既得権益者との間に当然ながら軋轢が生じた。

またインテリ層は、タクシンの強権政治によって、三権分立まで脅かされつつあることに危機感を抱いた。

したがって反対派は、裕福な市民や、知識階級の人々が中心となった。

タクシン凋落の最初の兆候は、欠陥法案を作って国王から叱責されたことだった。これは単純なミスが原因だったのだが、国王が国会で可決された法案に署名しなかったのは、タイの憲法史上初めてのことだったという。この事態にタクシンは激怒して、記者会見も拒否した。

タイの正式名称がタイ王国であることからわかるように、タイ国王は今でも特別な権限を持っている。しかし、現在の国王はその特権を悪用せず、クーデターを起こした將軍をたしなめるなど、むしろ悪政を正す形で行使してきた。そのため、国王は国民から絶大な信頼と尊敬を得ている。日本で言えば、水戸黄門のような存在だ。タクシンは、国王を軽視していると批判されるようになった。実際、独裁体制を布こうとしていたタクシンは、民主化の推進を口実に、国王の政治介入を封じようと画策していた節がある。特に国王の懐刀と言われる、ブレム元首相との激しい確執は自明の理であった。

国民に慕われている国王との対立は、反対派につけ入る隙を与えることになった。故に反対派は、王様のシンボルカラーである黄色のシャツを着て、自分たちは国王の臣民だとアピールするようになったのである。

そして、ついにタクシンは致命的な失策を犯した。

2006年1月、自ら興した携帯電話会社の株をシンガポールの政府系投資会社に売り渡し、730億バーツ（約2200億円）という、莫大な売却益を得た。

タイでは株の売買に税金がかからない。相続税もないので、タクシンは税金をほとんど払わずに、一族に名義変更までして売却した。しかし、タイにはタンブン（布施）という慣習があり、持てる者

は寄付や施しをすることによって、仏教に帰依し、面目を保つことができる。ところがタクシンは、莫大な収入があったにもかかわらず、それに見合うタンブンをしなかった。

何よりも問題となったのが、売り渡した会社が国家の安全にまで関わる通信事業の会社であり、しかも売った先が、タクシンと同じ客家が国を牛耳っている国、シンガポールだった点だ。

反タクシン派は、タクシンは国を売り渡したと非難した。

華僑が権力と富を独占する国……国民から慕われる国王さえも、実は客家の末裔である国タイ。それでも、現在に至るまで民族対立が起こらなかったのはなぜか？

それは、タイには暗黙の了解、不文律のようなものがあったからだ。例えば出自が華僑であっても、彼らは純然たるタイ人であった。どんなに私利私欲に走っても、祖国だけは絶対に裏切らない。タイに愛国心と忠誠心を持っている。最低条件として、それさえクリアしていればすべて大目に見よう。

ところが、客家なまりで話すこの四角面の男は、金のためなら、平気でタイを売り渡すだろう。そう確信した時、反タクシン派の焦りは恐怖にまで高まった。どんな手段を使っても、タクシンを権力の座から引きずりおろさなければならぬと……。

彼らはPAD『民主主義のための国民連合』という団体を組織して、反政府運動を展開した。PAD参加者の多くが、黄色いシャツを着たので、通称『黄シャツ』と呼ばれている。

黄色いシャツの起源について補足しておく、タイでは曜日ごとにシンボルカラーが決まっていて、月曜日は黄色となっている。今の王様は月曜日に生まれたので、市民の間で月曜日に黄色いシャツを着て、王様に敬意を表すことがブームとなった。

一時は、月曜日になると街が黄色で埋め尽くされるほど大流行したが、PADが着るようになってからは、黄色いシャツを着ている

と赤シャツから狙われるので、PADのメンバー以外は着なくなっている。

ちなみに、タイの王室を象徴する色はピンクなので、黄色は現国王に限ったシンボルカラーということになる。

クーデターの噂が広がる中、2006年8月、タクシン暗殺未遂事件が起こった。首相宅近くで、大量の爆弾を積んだ車が発見され、運転していた軍の士官が逮捕されたのだ。

翌月、危機を察したタクシンは外遊を名目に、持てるだけ金を持って国外に逃れた。その留守中、クーデターが起こった。

国外に逃れ、亡命者となったタクシンも、そのまま黙ってはいなかった。

国外から選挙を支援して、傀儡政権を誕生させることに成功した。そして凱旋を果たしたのもつかの間、汚職で実刑判決が出る寸前に、わずか五ヶ月ほどタイに滞在しただけで、2008年7月、タクシンは再び国外に逃れた。

いくら反タクシン派が結集しても、有権者の数では農村部に遠く及ばない。そして農村部では、相変わらずタクシンはヒーローとして祭り上げられている。数が物を言う選挙では、タクシン派に絶対勝てない。そう悟った黄シャツは、ついに非合法手段に出た。

黄シャツは、メンバーを大動員して、首相官邸や空港を占拠し、座り込みを開始した。空港が使えなくなった影響で、タイは莫大な経済損失を被ったが、結局黄シャツは逮捕者を出すことなく勝利を得た。反タクシンの民主党が、政権を掌握したのである。

こうして正当な選挙ではなくて、非合法な手段で現政権は誕生した。そしてこの時の黄シャツの反政府運動が、赤シャツの暴挙につながる悪しき前例となった。政府を転覆させるためには、何をしておかまわないのだ。どんな非合法なことをしても、反対派が勝利さえすれば、罪に問われることはない……！

一方タクシンは、黄シャツに対抗して、UDD（反独裁民主戦線）を組織した。UDDは、国家と国民の団結を象徴する、タイ国旗の赤をイメージカラーにして、メンバーが赤いシャツを着るようになったので、通称『赤シャツ』と呼ばれている。

しかし、本当にそうだろうか？ 赤いシャツを着て、赤旗を振るのは、それだけが理由なのだろうか？

タクシンの背後には、常に紅い国の存在がちらついている。実際タクシンは、他のどの国よりも訪中を重視していた。

タクシンには、共産主義思想の側近が多いから、国王をないがしろにしたのだということもよく言われてきた。タクシン政権の政策を見ても、それは色濃く表れている。

赤シャツが中国から買った装甲車を走らせていたこと、さらに黒服が軍並みの重火器を備えていて、タイ軍が使用している米国製自動小銃M16だけではなく、旧ソ連で開発されたAK47を使用していたことも、裏で紅い国が支援しているのではないかという根拠になった。

日本にいと実感がわかないが、大陸で暮らす人々にとって、共産党の大国の存在は身近な脅威なのだ。いつ傀儡政権に取って代わられて、国の主権が侵されてもおかしくない。それは現実的な恐怖であり、華僑の中にも中共アレルギーの人は多い。むしろ華僑であるが故に、母国を過小評価しないのである。

四月十日に、あれだけの犠牲者を出しながら、現政権に対する批判が日本人には理解できないほど少なかった。その背景の一つとして、この根深い中共アレルギーがあげられる。

2010年、四月十日の衝突が起こった直接のきっかけは、二月二十六日に遡る。この日最高裁は、タクシンが国内に残した資産、766億バーツのうち、464億バーツを不正蓄財と認め、没収するという判決を下した。

莫大な資産が国庫へ没収されるのを黙って見過ごすわけにはいかない。そこでタクシンは、大金を投じてでも、これを阻止しようと決断した。

タクシンは大金をばら撒いて人を集め、UDDに大規模デモを実施させた。赤シャツ一人頭、日当五百バーツ支払ったと言われている。

貧しい農民たちにとって、きつい農作業をやるよりも、都会へ行って、働かずにお祭り騒ぎで盛り上がって、日当まで貰えるというのは、断る理由が見当たらないお誘いだった。しかも、三度の食事までただで支給されるのだ。

もちろん、彼らは紛れもなくタクシン支持者ではあったが、赤シャツの多くが、そうやって集められた素朴な農民たちだと見られている。

追放された独裁者が、私欲のために扇動したデモ隊が、非合法な手段で成立した現政権に、解散総選挙を要求して行った抗議活動……というのが、今回の赤シャツ騒動のそもそもの発端だったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9083y/>

チャオプレイヤー川の夕日

2011年12月2日02時58分発行